

# 遠き宿縁

ことのおこりは昭和六十年頃、ごみの山のよ  
うな古文書の中から、「奴可郡東城町真宗徳了  
寺由来書」と題する文書を見つけたことに発し  
ます。中身は「慶長九年に開基したが、一時断絶  
した寺を公儀から請取って、五代目の住職とな  
り二十五年になる。自分は廣嶋細工町の出身で  
ある。」というもので、延宝九年に書かれ、明信  
という署名がありました。広島市に今もある西  
向寺の住職が、はるばるやってきて徳了寺を再  
興し、私の先祖である村上浄信に譲り、また自  
坊に帰っていったとは承知していたのですが、  
はるか彼方の出来事くらいにしか感じていま  
せんでした。自筆の書を目の当たりにして、自  
ら住職を務める寺の歴史を、真剣に思いめぐら  
すようになりました。

何かの縁に、この古文書のことを西向寺様に  
伝えましたが、そのような事実は承知していな  
いという御返事をいただいたと記憶します。平  
成十二年夏中国新聞に、原爆で焼失した広島市  
西向寺の本堂庫裡が、五十余年ぶりに再建され  
たという記事が掲載されました。明信師もさぞ  
やお慶びのことと思ひ、師の書に御帰山いただ  
く心持ちで、書をたずさえて西向寺様をたずね  
ました。床の間に書を掛けさせていただき、若  
坊守様にあらためていきさつを説明しました  
が、本堂で手を合わせたとき、次のようなお話  
を聞くことができました。

昭和二十年原爆投下の十日余り前の七月二  
十六日、音戸町のある篤信のご門徒が、「西向寺  
が炎に包まれる夢を見た。ご本尊を預かって帰  
りたい。」と申し出られた。阿弥陀様に寺を留守  
にしていたわけにはいかないので、と一旦  
お引き取りいただいたが、数日後ふたたびおい  
でになり、「どうしても気がかりだ。今日はお預  
かりするまで、帰るわけにいかない。」と土間に

座り込まれた。しょうことなくご絵像ともども  
お渡ししたあと、八月六日に原爆が落ちて、寺  
は跡形もなく消えた。

後で差し上げた手紙の中に、「お念仏は原爆  
に勝った。」と書いたと記憶します。実際大千世  
界に満ちみちた炎を越えて、南無阿弥陀仏の声  
が届いてきたような心地がしたことでした。そ  
れに重ね合わせて三百年前、歩いて二日も  
かかる中国山地の田舎にやってきて、ゼロから  
出発して寺を二十五年かけて起こした先人の  
苦勞に思いを致し、私にお念仏が届いて下さっ  
た遠き宿縁に手を合わせました。

中国山脈の山奥に、当時盛んであったたら  
製鉄でさかえた東城という町がありました。織  
田信長と戦った石山本願寺の寺侍の子孫が住  
み着き、大坂屋を名のり、鉄の商いで財をなし、  
二代目久左衛門の時代に全盛を誇りました。久  
左衛門は篤信の念仏者で、先代新左衛門が中心  
になって興した徳了寺という念仏の道場が、経  
済的・社会的基盤が薄弱であったために有名無  
実になっていったことを憂え、何とかこれを再興  
しようと奔走したようです。いかなるつてを頼  
んでか、廣嶋の中心地に大坊の住職として、あ  
またの弟子も育てていた西向寺開基二世一幽  
明信師に協力を要請しに参ったようです。  
明信師の返事を想像して、次のように書きま  
した。

「確かに弟子の中には有望な若者もいるが、  
彼らの力をもってしても、一寺を建立すること  
は至難のわざである。貴殿の折角の志を実現す  
るために、宜しい。私が自ら赴いて寺院再興の  
基礎を固めようではないか。ある程度見通しが  
立った上で、これを弟子に譲ろう。それが私に  
課せられた仏恩報謝の行というものである  
う。」と。

この明信師の、人生後半の二十五年という貴  
重な時期をつぎ込んだ、身を粉にしての報謝行  
が、長い年月の間にほとんど忘れ去られていた  
事実には愕然としました。はつきり目に見える形

に残そうと、法名軸を作成し、本堂余間に掲げ  
てお給仕してはと計画をたてました。古文書の  
言い方そのままに「自信教人信 難中転更難  
大悲伝普化 真成報仏恩 権大僧都 一幽明  
信法師」と、三重県桑名市 法盛寺老院 福井  
照真先生にお願いして、揮毫の勞をいただきま  
した。平成十二年四月八日先住五十回忌を縁と  
して、西向寺現住高松秀峰師を導師に迎え、法  
名軸開軸法要を営みました。福井照真先生には  
法要講師までお願いしたのですが、明信師の功  
績をいみじくも、「どの寺の歴史にもドラマが  
あるんやな。自分の寺はつといて、ほかの寺興  
しにいくなんて、そんなことでけへん。」と讃え  
られました。

明信師が廣嶋を離れた翌年、村上水軍の後裔  
を名乗る十四歳の若者が得度し、西向寺の弟子  
となりました。この若者は「早くから廃寺を再  
興したいという志を抱いて」と自ら述懐して  
いますが、二十代後半には後を追ってやってき  
て明信師に師事し、幽照浄信と称しています。  
大坂屋久左衛門が天和二年に往生し、その葬儀  
をすませて明信師は廣嶋西向寺に帰山された  
ようですが、浄信は跡を継いで徳了寺六世住職  
となりました。二年後門徒衆の協力を得て本堂  
建立に取りかかり、元禄元年に完成し、入仏法  
要を営むことができたようです。浄信はその喜  
びを、兄弟弟子と思われる西向寺開基四世住職  
とともに、誇らしげに書き記しています。

西向寺は徳了寺という見ず知らずの寺を立  
ち上げるために、実に三代にわたって膨大なエ  
ネルギーをそそぎ込んだことになるでしょう  
か。この寺には明治期から昭和期にかけて高松  
悟峰和上という学僧がでられ、真宗学寮・広島  
仏教学院を創立されて、「念仏広まれ」の人材と  
拠点を育てることに力をそそがれて現在に  
至っています。この尊い寺風がきわめて早い時  
期に、現在の広島県を対角線上に進み、東北の  
片隅にまで届いていたとは驚きというほかは  
ありません。

それにしても、一幽明信師と大坂屋久左衛門  
との間にはいかなる友情が存在したのでしょ  
うか。久左衛門の実父は福本友安といい、「石山  
籠城三十騎の首にて忠戦の功あり。」と大坂屋  
の子孫が明治に入って書きとめています。江戸  
期の文書にはまったく見あたらないので、織田  
信長という権力者に盾ついたことは、その時代  
にはタブーだったのでしょうか。西向寺史によ  
れば、開基一圓明賢師は「赤松大助という勇猛  
剛強な武士」だったとのことですから、寺史に  
はありませんが同じ石山本願寺のさむらい  
だったのでは、と私は秘かに考えています。西  
向寺が当初今という大谷派の寺院として出発  
したそうですから、教如上人に従った猛者だっ  
たのでは、とも考えます。幽照浄信の先祖村上  
水軍も石山側に味方して戦ったといいますが  
ら、そこに「石山本願寺」というキーワードが浮  
かび上がってきます。石山本願寺という武装  
集団が武装解除させられ、さむらい達はあ  
るいは農民に、あるいは町人に、あるいは僧侶に  
なって各地に住み着いた。しかしお互い「南無  
六字の城」を命を捨てて護った縁から、あり  
がたい念仏者となり、本願寺教団の形成に大切  
な役割をはたした、といったことはなかったで  
しょうか。浄土真宗の末寺が、西暦二千年前後  
に開基四百年を迎えるところが多い、とも聞き  
ました。そこに歴史のロマンを強く感じていま  
す。世間には「本願寺は蓮如上人の遺産で食っ  
ている。」とか「江戸時代以降停滞と衰退の歴史  
だ。」という人がいますが、それは大きな間違い  
だと思います。蓮如上人の時代に本願寺が確立  
し、京都堀川の地に寺基を移して、教団組織が  
形成され、以後発展と充実の歴史を近年まで続  
けてきた、というのが本当ではないでしょう  
か。このことは二十一世紀の真宗史と学術の研  
究者に明らかにしてもらいたいと念願します。

徳了寺住職 村上倅 笋